セルバンテス

ドン・キホーテ

EL INGENIOSO HIDALGO DON QUIJOTE DE LA MANCHA

会田由訳

第2巻

晶文社

著者について

セルバンテス

一五四七年、スペインの貧しい外科医の家に生まれる。青年時代から演劇に興味をもち、ソネットや四行詩を書く。二二歳のときイタリアに渡り、ルネサンス末期のイタリア文化にふれる。七一年、スペイン歩兵隊の共士としてトルコとの「レパントの海戦」に参加。左手を負傷し、生涯自由を失う。帰国途上海賊船に襲われ、アルジェリアで五年間の捕虜生活を送る。八五年に処女小説『ラ・ガラテーア』を出版。その後「無敵艦隊」の食糧調達人などの職についてしばらく創作を断念する。一六〇五年、五八歳のときに畢生の傑作『ドン・キホーテ前篇』を刊行、驚異的な成功を収める。十年後『後篇』刊。世界文学史上に輝く永遠の名作として読みつがれることになる。一六一六年没。

訳者について

会田由（あいだ・ゆう）

一九〇三年熊本県生まれ。東京外国語大学スペイン語科卒業。一九七一年没。

訳書―セルバンテス『サラマンカの洞穴』『模範小説集』、モラティン『娘たちのはい』、アラルコン『三角帽子』ほか。

ドン・キホーテ　第2巻

一九八五年四月一〇日初版
一九八五年七月二〇日二刷

著者　セルバンテス

訳者　会田由

発行者　株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二―一―一二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六―六二七九九

堀内印刷・牧製本

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉　落丁・乱丁本はお取替えいたします。

セルバンテス

ドン・キホーテ

EL INGENIOSO HIDALGO DON QUIJOTE DE LA MANCHA

会田由訳

晶文社

Miguel de Cervantes Saavedra

EL INGENIOSO HIDALGO
DON QUIJOTE DE LA MANCHA

1605

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ドン・キホーテ　第2巻　目次

才智あふるる郷士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ　前篇2

第四篇

第二十八章　同じ山地で、住職と床屋にもちあがった、あらたな、楽しい冒険について ……11
第二十九章　われらが恋愛の騎士がみずから行なっているいとも烈しい苦行から、彼をつれ出そうとしてとられた愉快な詭計と手順について ……34
第三十章　ここでは美しいドロテーアの機知と、そのほかいとも面白い、楽しいことどもを扱う ……53
第三十一章　ドン・キホーテと従士サンチョ・パンサのあいだにかわされた楽しい問答、およびその他の出来事について ……70
第三十二章　旅人宿でドン・キホーテ一行の上に起こった出来事について述べる ……84
第三十三章　ここでは『無分別な物好きの小説』が述べられる ……96
第三十四章　『無分別な物好きの小説』がつづけられる ……125
第三十五章　ドン・キホーテの赤ぶどう酒の革袋を相手の烈しい大立廻りが述べられ、『無分別な物好きの小説』に結末がつく ……156

第三十六章　旅人宿に起きた、これまた珍しいくさぐさのことについて……168
第三十七章　ここでは名高いミコミコーナ王女の物語がつづき、その他おどけた冒険のこと……183
第三十八章　ドン・キホーテが文武両道について行なった奇妙な演説について……199
第三十九章　『捕虜』がその身の上の出来事を語ること……205
第四十章　『捕虜』の物語なおもつづくこと……218
第四十一章　『捕虜』がその物語をなおもつづける……238
第四十二章　さらに旅人宿で起こったこと、そのほか知るに価するくさぐさのことについて……268
第四十三章　ここでは、騾馬追いの若者の楽しい身の上話と、旅人宿に起こった、奇怪なくさぐさの出来事が語られる……279
第四十四章　ここでは旅人宿での前代未聞の出来事がつづく……297
第四十五章　マンブリーノの兜と荷鞍の疑問、およびその他のすでに起こった冒険の取調べが、明々白々に終わること……311
第四十六章　捕り方どもの目ざましい冒険、およびわれらが頼もしき騎士ドン・キホーテの獅子奮迅ぶりについて……322

第四十七章　ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャのかけられた魔法の不思議、そのほか驚くべき出来事のくさぐさについて……335
第四十八章　ここでは、役僧がなおも騎士道物語のことを論じ、さらに彼の才智にふさわしきその他の問題について論ずる……350
第四十九章　ここでは、サンチョ・パンサが主人ドン・キホーテとかわした思慮深き対話を扱う……361
第五十章　ドン・キホーテが役僧ととりかわした機知に富む論争、およびその他の出来事について……372
第五十一章　山羊飼いがドン・キホーテを連れて帰るすべての人たちに話したことを物語る……381
第五十二章　ドン・キホーテと山羊飼いとのあいだに起こったつかみ合い、ならびに、大汗をかいてめでたくおさめた、行者相手の世にもまれな冒険……388
訳注……410

才智あふるる郷士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ　前篇2

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ブックデザイン　平野甲賀
挿絵　ギュスターブ・ドレ

第四篇

第二十八章

同じ山地で、住職と床屋にもちあがった、あらたな、楽しい冒険について。

いとも大胆な騎士ドン・キホーテを世に送った時代は、まことに楽しい、幸福な時代であった。なぜかといえば、すでに凋落して、ほとんどほろびていた遍歴の騎士なる制度をよみがえらせ、世の中に再現しようという、じつにけなげな決心を彼がいだいたおかげで、この心浮きたつ楽しみ少ないこのわれらの時代に、彼の実録の面白さばかりか、部分的には物語そのものに劣らず楽しい、技巧と真実に富んだ、実録の中に現われる短篇や挿話の面白さをわれわれはいま存分に味わうことになったからである。さてその物語は、紡いでよりをきかせ、枷にとった話の糸をつづけ、住職がカルデーニオを慰めようとしたとき、ふと耳に聞こえた声にさまたげられたが、それは悲しげな調子でこう言って

いたと、述べている。
「おお、神よ！　こうしてわたしが、いやいやながら支えている、このからだの重荷をこっそり葬ることのできる場所が見つかったらしい！　この山地の示している人気なさが、間違いないものなら、きっとそうなるはずよ。ああ、なんという不幸な女だろう、わたしは！　この岩山や叢が、どんな人間より、わたしの目的には、気持のよい友達になってくれるかわかりはしない。きっと、嘆きながらわたしの不幸を天にむかって訴えるにはもってこいの場所なんだわ！　だって、この地上には、迷うときの忠告も、嘆くときの慰めも、苦しむときの安らいも、与えてくれる人は誰ひとりいやしないのだから！」
　住職も、彼といっしょにいたほかの連中もこういう言葉を耳にしたばかりか、残らず聞いた。そして、事実そうだったのだが、ごく近いところで言っていたように思われたので、その言葉の主をさがそうと立ちあがった。そこで、ものの二十歩も歩かないうちに、大きな岩のうしろの、とねりこの木の根元で、農夫のような衣服をつけた若者が腰をおろしているのを見つけた。そこを流れている小川で足を洗っていて、顔をうつむけていたので、そのときは若者の顔は見えなかった。みんながひどく静かに近づいたので、若者もそれにはまったく気がつかなかったばかりか、ただ足を洗う以外には余念がなかった。しかも、その足は小川の石のあいだから生まれ出た二本のまっ白な水晶としか見えなかった。この足の白さ、美しさに、人々は思わず目を見はった。それは、その足の主の身なりからも察せられるように、土くれを踏んだり、犁や牡牛のあとから歩いたりしつけている足とは、どうしても思われなかった。で、若者に感づかれてはいないと思ったので、さきに歩いていた住職は、他の二

人にむかって、からだをかがめるか、そこいらの小岩のうしろに身をかくすようにと合図をした。そこで一同身をかくして、若者のすることを、じっとうかがった。若者は両脇のひらいた黒ずんだ合羽を羽織って、白いタオルで胴をきっちりしめていた。さらに、黒ずんだ羅紗の半ズボンの脚絆をつけ、頭にはこれまた黒っぽい頭巾をかぶっていた。脚絆を脛の半ばまでまくりあげていたが、それは、たしかに雪花石膏で作られたかのようだった。若者は美しい足を洗い終わって、すぐに頭巾の上から頭髪用のきれをとり出して、足をふいた。しかし、布をとり出そうとしたとき、若者が顔をあげたので、それまで彼を見守っていた連中も、たぐいまれな美貌を見ることができたが、それはカルデーニオが住職に、低い声でこう言ったほどの美しさだった。

「これは、ルシンダでないとしたら、人間じゃない、神人ですよ」

若者は頭巾をぬいで、頭を左右にふると、長い髪がほどけて垂れさがったが、それは日輪の金髪もうらやむかと思われた。そのおかげで、彼らは農夫だと思っていた若者が女性だったということを知った。しかも、優にやさしい、それどころか住職と床屋がそれまで見た中でももっとも美しい、カルデーニオにしてもルシンダを知って見つめていなかったとしたら、それまで見た中でも、もっとも美しい女性だった。だから、後でカルデーニオは、この人の美貌に比べられるものは、ただルシンダの美しさだけだと認めたのだった。長い金髪は彼女の背中をおおったばかりか、髪の下に女のからだをすっぽりかくしてしまったのだから、足はともかく、からだのどこといって見えなかった。それほどまで美しい、豊かな髪だったのである。そのとき、櫛のかわりに手でくしけずったが、水につかった足が水晶でできていると見えたとすれば、髪の毛をくしけずる両の手は、雪をかためたようにも思わ

れた。こういうことから、彼女を見守っていた三人の男は、いよいよ感にたえて、相手が誰か知りたくてたまらなくなった。

そこで、彼らは姿を現わそうと決心した。みんなが立ちあがったけはいで、美しい女は顔をあげた。そして顔にたれさがった髪を両手ではらいのけ、音のしたほうを見たが、人々の姿を見たかと思うと、とっさに立ちあがって、靴をはいたり、髪をつかねたりするひまもなく、そばにあった下着類か何かの包みをすばやく取りあげて、あわてふためいて逃げ出そうとした。しかし五、六歩も行かないうちに、きゃしゃな足では石のごつごつした地面に耐えかねたとみえて、ばったり倒れてしまった。それを見ると、三人の男は女のところへかけよっていって、最初に住職が声をかけた。

「どなただか知らんが、お待ちなさいよ、娘さん。ここにいるわしら三人は、ただあんたのお役に立ちたいと思っている者ばかりですわ。だから、何もそうむやみと逃げるこたありませんよ、あんたの足じゃとても逃げおおせるもんじゃなし、わしらのほうでもそれをほうっておくわけにもいかんのでな」

こういう言葉を聞いても、娘はあっけにとられ、当惑して、ひとことも答えなかった。みんながやって来て、住職は娘の手をとりながら、なおも言葉をつづけた。

「なあ、娘さん、着物でわしらの目をくらまそうとしなすっても、そのあんたのおぐしが承知しませんわい。あんたのような美しい方が、そんなそぐわない服装に身をやつして、こういう人里離れたところへ来なすった事情が、なみたいていのことじゃないというそれがなによりの証拠というものじゃ。それにここであんたにお会いしたことは、あんたを苦しみから助けてあげることはできなくとも、せ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com